

C- I -13 呼吸器離脱困難な事例を通して看護師の役割を振り返る

昭和大学病院 集中治療部 佐藤美代子 石原実千代 小磯恵美

【目的】

長期人工呼吸器管理からの離脱が困難であった事例を振り返り、患者の回復過程に影響を及ぼしていたものが何であったのかベナーの看護理論を用いて分析した。

【事例】

A氏、57歳男性。上行置換術施行後、1年を経て縦隔洞炎を続発し胸骨部分切除、搔破、洗浄を行ったが治癒せず大動脈基部置換、大網充填術を施行した。そのため長期にわたり人工呼吸器を装着した。A氏には胸骨欠損があり体動制限を伴う安静が強いされていた。術後23日後にTピーストライアル開始したが、呼吸筋疲労のため離脱不能であった。人工呼吸器離脱に向けCPAPを使用し呼吸リハビリやADL拡大を行っていたが、その経過中に患者は抑うつ状態になり、しばしば、呼吸リハビリ等は中断された。ICU入室後63日後にCPAPのまま一般病棟へ転棟となった。

【考察】

人工呼吸器装着中の種々ある心的ストレス因子中でA氏は、特に病気前の身体的ボディーイメージに気づかい、関心を持っていた。そしてそれに戻るようA氏は必死に努力したが回復しなかった。今回我々は、A氏が病気後の自分の身体的変化を受け入れられなかつたことが抑うつの原因となり、呼吸リハビリ等が中断され離脱期を更に長期化させた最大の要因ではないかと考えた。離脱時は呼吸機能の改善に焦点がたられる傾向があるが、実際は患者の回復過程に影響を及ぼしたのは疾病から生じる身体的変化のみならず、それを体験するA氏の人間的反応によるところが大きかったと考えられた。

【結語】

ベナーの看護理論にある患者の関心がいまどこにあり患者理解が疾病回復ではなく病気の回復に繋がること、そして一番側にいる看護師が患者の人間的反応に瞬時に気づき対応する役割があることを再認識し振り返る。